

自己実現への道

第48回 ー第2章 「積極思考」をする者は山をも動かす(その4)ー

●百見は1回の試みにしかず

釣り名人がいて、素晴らしく大きなお魚を釣り上げているのをみて、「あの人達はプロ級の人たちだから、自分たちにはムリ！」と思ってしまうこともあるだろう。しかし、「自分にはムリ」と決めつけるのは早い。やってみることだ。やらなければ結果は出ない。意外と出来るかも知れない。

■「行ってみよう。やってみることだ。きっと驚くほどうまくいくから…」

獲物を狙う執念というか、信念があれば結果が生まれる。信じて徹すれば、失業者は仕事を見つけることができ、孤独な人も友を得ることができる。その気になって、着手しさえすれば、長い間抱いていた夢が実現できるのだ。何事にも、積極的に対応しようではないか。人生で本当にほしいものを求めて、釣りにでかけよう。

■百聞は一見にしかず、百見は一回の試みにしかず。まず、試みること。それによって道が拓けてくる。「食わず嫌い」だと、いつまでも美味しいものを食べることができないのだ。

●ギリギリの限界ではじめて可能性が大きく開ける

世の中のことはたいてい、あわや失敗と思われる瀬戸際までがんばってこそ、成功するものだ。棒高跳びの選手のように、少しずつバーを高くして、跳躍を繰り返し、最後には限界に挑む。ギリギリの限界までがんばってこそ、自分自身の可能性を知ることができるのだ。失敗は成功への布石である。

■自分のゴールに到達しない、ということは失敗を意味しない。失敗とは、自分の計画に対して、自分の持てるものをすべてを投入しないことを言うのである。そして、成功とは、自分が今置かれている環境の中で、持てる力の最大限を発揮することを言う。

生活目標を低く設定し、超えるべきバーを安全な高さにセットして、失敗の危険が伴うことには決して挑戦しない人こそ、本当の敗北者である。失敗の恥辱に敢然と対決する信念が必要である。成功は、もうとてもこれ以上は頑張れないという極限の時点でやってくる。拍手は全力を尽きた者だけに贈られる。勝者、敗者に関わらず、観衆はベストを尽くした者を愛する。

■「私の人生は失敗の連続である」(本田宗一郎)

失敗の体験によって人生は大きく発展する。多く失敗すれば発展のチャンスも多くなる。ただし…積極的に取り組むならば…という但し書きが必要なのだ。

本当の失敗者とはどんなものか理解できたはずだ。

日々ベストを尽くしていれば、私たちは成功への道をたどることができる。
自信をもって、前進しつづけようではないか。

〈MIKO〉

参考文献：Tough Minded Faith For Tender Hearted People by Robert H Schuller より